

日本分析化学会第70年会開催報告

表1 第70年会の分類別講演数の一覧表

分類	一般 口頭	一般 ポスター	若手 ポスター
01. 原子スペクトル分析	11	4	5
02. 分子スペクトル分析	12	4	12
03. レーザー分光分析	10		5
04. X線分析・電子分光分析	5	4	6
06. 磁場を利用した分析	1		
07. 電気化学分析	18	3	14
08. センサー, センシングシステム	17		14
09. 熱分析	1		3
11. 質量分析	5	3	11
12. マイクロ分析系	4	1	4
13. フローインジェクション分析	5	1	4
14. 液体クロマトグラフィー	9	4	10
15. ガスクロマトグラフィー	2	2	5
16. 電気泳動分析	3		3
17. 溶媒抽出法, 固相抽出法, イオン 交換系	5	1	8
18. 分離・分析試薬の設計	8	2	8
19. 分析化学反応基礎論	9		6
20. データ処理理論	2		
21. 標準試料		2	
22. サンプルング, 前処理		1	2
23. 界面分析	11	3	5
24. 微粒子分析および微粒子利用分析	8	1	4
25. 宇宙・地球に関する分析	5	2	4
26. 環境関連分析	16	6	9
27. 無機・金属材料分析	4		3
28. 電池・エネルギー材料	2		5
29. 有機・高分子材料分析	4	1	4
30. 食品・農作物・ヘルスケア等分析	2	2	4
31. バイオ分析	28	2	19
32. バイオイメージング	5		2
33. 医薬分析		2	
34. 臨床分析		3	3
36. その他		1	2
計	212	55	184

1 はじめに

日本分析化学会第70年会は、2021年9月22日(水)～24日(金)の三日間、当初は神戸大学鶴甲第1キャンパスにおいて現地開催される予定だった。しかし、前年の第69年会をオンライン開催に迫りやった新型コロナウイルスは、年が明けても猛威を振るい、第70年会もオンライン開催にしてしまった。折しも、年会・討論会担当だった二人の事務職員が相次いで退職したため、年会実行委員会が主導的に年会の準備・運営を行わざるを得なくなった。しかし、第69年会の大谷 肇実行委員長、本年5月開催の第81回分析化学討論会の遠藤昌敏実行委員長、そして両実行委員会の委員の方々から、オンライン開催のノウハウをご教示いただき、そのお陰で特に大きなトラブルもなく成功裏に年会を終えることができた。まずは、この紙面をお借りし、ご支援いただいた皆様に深く感謝の意を表します。

本年会では、一般講演(口頭, ポスター), 若手ポスター, テクノレビュー講演(口頭, ポスター), 研究懇談会講演, および受賞講演が行われた。ただし、通常行われてきた特別シンポジウムは敢えて設定しなかった。これは、特別シンポジウムが一般講演を圧迫することを避けたかったからである。かつては特別シンポジウムが乱立し、同じ時間帯に催された一般講演の会場に閑古鳥が鳴いていたということもあった。そこで、年会が新しい研究成果の発表の場であるという原点に帰り、一般講演の会場が活気あるものになることを狙った。その目的は十分に達成できたと思う。

特別シンポジウムは行わなかったが、産官学連携の見地から、分析イノベーション交流会主催で本年会共催の「ものづくり技術交流会2021 in 関西～分析に役立つ基礎技術」を、年会前日の21日の午後に開催した。全登録者166名で盛会であったとのことである。また、「産業界における研究開発と分析ソリューション」シンポジウム企画運営委員会主催の「産業界 R&D 紹介講演」(ポスター4件)も、一般公開(無料)で開催した。

昨年に引き続き今回もオンライン開催になったので、十分な数の講演申込や参加登録があるかと危惧したが、結局、受賞講演などを含む講演総数486件、有料の参加登録者数814名となり、いずれも初めてのオンライン開催の前年会を上回った。会員の皆さんがオンライン開催の学会に慣れてきたことが一因かと思われる。表1に、本年会の分類別講演数の一覧を示した。

2 オンライン講演

口頭発表(一般講演212件, テクノレビュー講演11件, 研究懇談会講演15件, 学会賞を除く各賞の受賞講演11件)は、Webex上でのA～Iの9会場で行った。ポスター講演(若手ポスター184件, 一般ポスター55件, テクノレビューポスター1件)はRemo上でのP, Yの2会場で行った。先行の年会・討論会で採用されたWebexとRemoを用いたのは、参加者の利便性を考慮したためである。



神戸大学内の本部の様子

年会当日は、現地開催予定地の神戸大学内の教室に「本部」を設け、そこに業者からレンタルした口頭発表会場用の PC 20 台（各会場 2 台 + 予備・接続テスト用会場分）を有線 LAN で接続し、18 名の学生アルバイトが会場のモニター、講演番号の掲示、タイマー係を行った。本部には、学生アルバイトのほか、数名の実行委員が常駐し、トラブルの対処などにあたった。なお、各会場の責任者はそれぞれの所属先などからリモート接続して臨んだ。

オンライン講演でのトラブルを未然に防ぐため、発表者、聴講者、座長、会場責任者のためのマニュアルの充実を図った。その甲斐あってか、細かいトラブルはあったものの、致命的なトラブルは回避されたようだ。発表者の声が途切れ途切れになったりするトラブルは散見されたが、おそらく発表者の PC や通信環境の不良が原因であろう。

今回、特別シンポジウムを行わなかったため、講演件数が比較的多かったにもかかわらず、プログラムの構成には余裕を持てた。ポスター発表は、口頭発表と重複しないように、昼休みを挟んだ前後に実施した。若手ポスターは、4 つのセッションにそれぞれ 45 件程度の発表があり、ピーク時には約 300 名のアクセスがあった。一般のポスターは、2 つのセッションにあわせて 55 件の発表があり、それぞれのセッションでピーク時に約 190 名のアクセスがあった。いずれのポスターでも活発な討論が行われたようである。なお、今回もポスターには Remo を用いたが、Remo は発展途上のシステムであり、仕様がしばしば変更されることから、例えば、ホワイトボードに貼り付けた画像の消し方に戸惑うなどの支障があったようである。しかし、幸いにも大きなトラブルは起こらなかった。

なお、本年会で用いたオンライン講演の当日用の Web ホームページは、先行の討論会のものを踏襲したものであったが、一つ大きな改良を施した。それは、プログラムページから各講演の要旨に直接リンクできるようにしたことである。講演を聞きながら速やかに要旨を閲覧できるようになり、有効に活用していただけたと思

う。

3 受賞講演

本年は、学会賞を除く各賞の受賞講演は、関連する分野の講演会場で実施した。前年はコロナ禍の影響による賞の選考の遅れのため、一会場に集約して執り行われたが、今回は賞の選考が間に合った形だ。各賞の受賞者（連名の場合は講演者）は以下の通りである。技術功績賞の野呂純二氏、松田直樹氏、脇川憲吾氏、奨励賞の稲川有徳氏、岩井貴弘氏、坂口洋平氏、菅沼こと氏、福山真央氏、女性 Analyst 賞の石垣美歌氏、保倉明子氏、そして分析化学論文賞の稲川有徳氏の 11 名の方々である。

一方、石濱 泰氏、宗林由樹氏、民谷栄一氏による学会賞受賞講演は、例年通り年会 2 日目の 9 月 23 日午後、他の講演等を並行して行うことなく単独で実施した。このため、受賞講演への参加者は 260 名超であった。今回、受賞講演用として Webex のアクセス上限に余裕を持たせて 1,000 人で契約（一般講演用は上限 200 人）したため、一部の講演で音声が届き取りにくいという支障はあったものの、大きな通信トラブルは起こらなかった。

4 オンライン付設展示会、ランチタイムオンラインセミナー

先行の年会・討論会にならって、オンライン付設展示会（5 社）、ランチタイムオンラインセミナー（企業セミナー）、バナー広告（10 社）を実施した。展示会は、会期中のみならず、その前後 1 ヶ月間も開設してアクセスできるようにした。期間中の総アクセス数は 566 件であった。

対面でのランチョンセミナーに代わる企業セミナーには 5 件の申し込みがあり、22 日に 4 件、24 日に 1 件のセミナーが開催された。ランチョンセミナーと違ってお弁当の提供がないため、聴講者が少ないことが心配されたが、実行委員会を中心に宣伝に努めたところ、1 会場当たり 30 名程度の比較的多数の聴講者があった。また、質問なども多く、概して活発なセミナーだったようである。

5 若手企画

今回は若手企画としてはポスター発表に対する審査と表彰を行った。この若手ポスターには、概ね 30 才以下の学生会員と若手研究者による 185 件の発表が申し込まれた。初日は昼休みを挟んだ前後のセッションにて、また 2 日目と 3 日目は昼休み前のセッションにて行われた。若手の会を中心とした一般会員の審査員 56 名による厳正な審査の結果、全 23 名を若手ポスター賞に選出し、年会終了後に実行委員長名で賞状を郵送した。受賞者は以下の通りである（敬称略）：齋藤暢顕（東洋大）、

高 磨央 (金沢大), 木原香澄 (九大), 田邊 壯 (阪府大), 保田あさ陽 (宇都宮大), Hui Hsin Khoo (東大), 清水祐哉 (東工大), 松浦匠真 (富山大), 吉岡昌紀 (明治大), Ziwei Zheng (京大), 高尾隼空 (阪府大), 中野克哉 (京大), 中谷明日香 (東葉大), 小宮未来 (東北大), 片岡 駿 (東工大), 小川真実 (慶大), 鈴木理志 (東北大), 箕浦千穂 (群馬大), 中条 瞳 (上智大), 川畑美佳 (富山大), 小野原郁海 (兵庫県大), 江口奈央 (九工大), 太田瀬良 (慶大)。

6 オンライン交流会

先行の年会・討論会では, Remo によるオンライン交流会 (懇親会) が開催されたが, 今回は趣向を変えて, SpatialChat というビデオチャットツールを使った。SpatialChat では, 懇親会場を模した 2 次元の仮想空間 (スペース) にアイコンが表示されており, 会話したい人同士がアイコンを近づけることで, お互いの声が聞こえるようになる。逆にアイコン間の距離が遠くなると, 声が聞こえなくなる。このように, 実際の懇親会に近い雰囲気が味わえる。また, メガホンのボタンを押すと, スペースにいる参加者全員へ話しかけることができる。ステージも設けられており, ステージに登壇した人は全参加者に向けてスピーチすることもできる。山本雅博氏 (甲南大) と吉田裕美氏 (京工繊大) の共同司会で, 山本氏の開会宣言の後, 本会会長の早下隆士氏 (上智大) と大塚実行委員長の挨拶があり, 近畿支部長の村松康司氏 (兵庫県大) が乾杯の音頭を取った。続いて 2022 年開催予定の第 82 回分析化学討論会の実行委員長である山本博之氏 (量子科学技術研究開発機構) からスピーチがあった。この後に, 司会の吉田氏が参加者を「誕生日の日を 7 で割った余り」の番号のルームへ誘導し, 面識のない会員同士の懇親を深める機会を設けるという趣向もあった。そして, ルーム指定のない自由歓談の後, 2022 年開催予定の第 71 年会の実行委員長である金田隆氏 (岡山大), ものづくり技術交流会の豊田太郎氏 (東大) からスピーチをいただいた。最後に, 前近畿支部長の茶山健二氏 (甲南大) から締めの挨拶があり, 盛



オンライン交流会での乾杯

会のうちに幕を閉じた。この交流会は, 講演などが全て終了した最終日 17 時から開催したが, 約 100 名の多数の方々のご参加をいただいた。

7 おわりに

最初に述べたように, 本年会はコロナ禍のためオンライン開催となりました。本来, 神戸というお洒落な街で神戸ビーフとワインを楽しみながら, 分析化学談義をしていただくはずでしたが, 誠に残念でなりません。

一方, オンライン開催になったものの, 有料参加者数は 816 名と, 2 年前に千葉大で対面で行われた第 68 年会の 1,119 名の 73 % となり, 期待以上に多くの方々のご参加を頂きました。お陰様で, 活発な議論が行われ, 参加者の皆様にとって有意義な年会になったと思われま

す。末筆となりましたが, 本年会のとてもハードな準備・運営を一生懸命努めていただいた実行委員の皆様, また, 実行委員会をサポートいただいた本部理事会や事務局の皆様, 複雑なオンライン講演の準備をお助けいただいた会社の皆様, そして何より年会にご参加いただいた会員の皆様に, あらためて深く感謝の意を表したいと思います。

〔神戸大学 大塚利行〕